

2025年度 実務経験のある教員等による授業科目

東京音楽大学

| 科目名称 | 単位数 | 科目区分 | 担当教員 | 教員経歴 | 授業内容 |
|--------------------------|-----|--------|-------|--|--|
| 憲法 | 2 | 教養科目 | 沖山 延史 | 弁護士。使用者側の労働事件を中心に多数の訴訟、労働審判、訴外交渉、団体交渉、労働局・労働基準監督署対応等の紛争案件を解決する一方、就業規則類の点検・改訂、働き方対応を中心とした労務コンサルティング業務も扱っている(16年)。 | まず日本国憲法制定史、日本国憲法の三大原理を学んだのち、国家の統治機構を概観する。第4回以降は、基本的人権に関する基本概念、及び、判例や時事問題等を取り上げ、争点を解説することにより、人権に関する理解を深める。 |
| | | | 佐野 知子 | 弁護士。一般民事のほか、会社法務、家族法まで幅広い分野に対応。また、講演経験も豊富で、ハラスメント対応、内部統制システムや危機管理を対象とした講演多数。2019年から、最高裁判所司法研修所民事弁護士教官としても教鞭をとる(21年)。 | |
| キャリアデザイン論 | 2 | | 山本みどり | キャリアコンサルタント。学生へのキャリア形成支援、就職支援、キャリアカウンセラー業務とともに、社会人へのキャリア形成、ビジネスマナー、チームマネジメント教育も担当。現役企業人事、採用教育担当として28年の実績。 | 自身と自身を取り巻く社会の状況を理解し、将来に向かいこれからの大学生活をどのように過ごしていくかを考える。毎週授業内で「自己と向き合う課題」への取り組みを行い、他者との共有を行うことで「自身について言語化する」練習を重ねる。自身の強みを明確にし「やりたいこと」を「できること」にして将来に繋げ、この大学生活をキャリア形成の礎とする。 |
| 合唱3(声楽専攻) 合唱A(声楽専攻以外) | 4 | 2 | 志村 文彦 | 東京二期会、新国立劇場、日生劇場、びわ湖ホール、兵庫県立芸術文化センター等、様々な舞台上で数多くのオペラの演目に出演。宗教曲や合唱曲、コンサートのソリストとしても多数務める(30年)。 | 200名規模の合同練習の他に、パート別練習、発声・発音指導を行う。また、出演者選抜のオーディションを公演毎に実施するなど、きめ細かい指導を目指す。毎年恒例となっているベートーヴェンの第九のほか、国内外のプロオーケストラ団体からの依頼により多くの公演に出演している。授業では演奏会に向けての練習、及び出演を行う。 |
| 合唱4(声楽専攻) 合唱B(声楽専攻以外) | 4 | | | | |
| 作曲法 | 2 | 専門共通科目 | 伊左治 直 | 室内楽作品を100曲以上、合唱作品を20曲以上発表するなど、作曲家として活動(32年)。 | 講義と実習を併用した形態による。作曲の原理に始まり、作曲の主要要素であるリズム・響き(和声)・旋律(及び対位法)など各方面からのアプローチによって、創作というものについて考察する。更にその発展形として、作品の構造分析・管弦楽法(楽器学)・編曲実習等にも触れる。但し、クラスごとの特性や習熟具合によって若干内容や順番が変わることがあり、学生に応じてレッスン形式を織り交ぜるなど、臨機応変に多角的なアプローチがなされる。各自の作品は、書くだけではなく実際に演奏もしてみる。そのため授業時間内に発表会形式の日が設けられる。 |
| | | | 中橋 愛生 | これまでに数多くの吹奏楽の作編曲作品を発表、プロやアマチュア吹奏楽団、学校吹奏楽に関わる。 | |
| | | | 神山 奈々 | 50曲を超える作品は、内外の音楽祭で取り上げられ著名な演奏家、演奏団体により演奏されている。現代音楽の分野においてオーケストラ作品を主軸として、創作活動を展開する作曲家として活動(15年)。 | |
| | | | 久田 典子 | ソロ、室内楽、コンチェルト、合唱など、幅広い作品を50曲以上発表、国内外で演奏されている。またこれらの作品の楽譜が出版され、CDがリリースされるなど、作曲家として活動(33年)。 | |
| 指揮法 | 2 | | 増井 信貴 | 1982年以降バリ・オペラ座やバイエルン国立歌劇場において数多くのオペラ上演に参加。1989年群馬交響楽団指揮者に就任。以後、ウィーン木管アンサンブルとの共演、ロストロポーヴィチ指揮新日本フィル定期演奏会での小オーケストラの指揮、長野冬季オリンピック開会式での「第九」演奏、さらにはテレビ出演やサイトウ・キネン・オーケストラのヨーロッパ公演への参加など、シンフォニー、オペラの両面で精力的な活動を続けている(40年) | 教育現場で実際に指揮台に立つことを想定し、指揮の基本的なテクニックを理解した上で作品の様々な要求に応じて使い分けられる技術を、毎回テーマを決めて学ぶ。 |
| | | | 石坂 宏 | 10代から宗教曲を初めとする合唱作品に親しみ、指揮をする。ヨーロッパ留学後同地の歌劇場と契約し、数多くの作品を指揮。同時にドイツ、スイスの音楽大学で計15年間学生を指導する。(オペラ、オーケストラ) 日本では新国立劇場オペラ音楽ヘッドコーチとして13年間活動。 最近では東京・春・音楽祭の子どものためのワークナー公演の指揮を三年間続ける。 | 指揮者に必要な楽式的知識(曲のしくみ)を学びながら、様々な曲を題材にし、毎回技術的なテーマを決めて指揮の技法を学ぶ。 |
| | | | 三河 正典 | 国内外の多くのオーケストラ、合唱団の指揮をする他、新国立劇場、二期会をはじめとするオペラ公演や、サイトウキネンフェスティバル、アルゲリッチ音楽祭などでも合唱指揮者、アシスタントコンダクターとして活動している。 | 指揮をするということは、「振る」ことだけではなく、音楽的知識は勿論のこと、沢山のことを学ばなければならない。この講義では指揮法を通して音楽について深く考察していく。 |
| | | | 三原 明人 | ヨーロッパと日本を中心に各地のオーケストラを指揮。バロックから現代までの幅広いレパートリーを持ち、自らもオーケストラやアンサンブルを組織して活動している。 | ピアノを前にしての指揮実技を、常に演奏されるべき音楽と関連づけて修得する。 |
| | | | 合計単位数 | 16 | |